

会計学に「ミレニアム問題」はある？

—眼下に広がる会計の地形—

駒澤大学経済学部教授 石川純治

賞金付き「ミレニアム問題」

丁度1年前の5月、天才アンリ・ポアンカレが20世紀初めに提示した難問「ポアンカレ予想」をついにロシアの数学者が証明したというニュースが世界中を駆けめぐった。アメリカの実業家が設立したクレイ数学研究所は、新世紀の幕開けに21世紀を象徴する難問7題を1問100万ドル（1億1千万円）という高額賞金を付けて発表した。これがかの有名な「ミレニアム問題」である。その難問の1つが解けたらしいというのだから、この話題はたちまち世界の数学者に飛び交い、数学界も大騒ぎとなった。

では、この世紀の難問を解いたといわれる数学者はどういう人物か。これがまた極めて興味深い。ロシアのグレゴリー・ペレルマンという数学者だが、およそ地位や名誉にまったく関心をよせない、天才にありがちな“奇人・変人”とでもいうべき人物だ。解かれた問題が超難問なら、解いた人物もまた超難解というわけである*。

その報道があった3ヶ月後の8月、スペインのマドリッドで数学のノーベル賞と言われるフィールズ賞の発表があり、その荣誉ある賞はペレルマン氏に贈られることになった。だが、彼はなんと受賞を辞退してしまった。その理由が、また常人でない。フィールズ賞の70年の歴史で受賞を断ったのは彼が初め

てというが、「自分の証明が正しければ賞は必要ない」と述べたという。なんとすばらしい理由ではないか。地位や名誉に汲々としていご時世、この世の人の言葉なのかと疑うほどだ。彼は仕事上の昇進や科学アカデミー会員への推薦も拒否し続けたといわれている。現在無職で、母親のわずかな貯金と年金だけが生活の糧というから、なんとも摩訶不思議な人物である†。

「ヒルベルト問題」の提起

筆者の手元に500ページばかりの『素数の音楽』（マーカス・デュ・ソートイ／富永星訳、新潮社、2005年）という本がある。そのタイトルも魅力的だが、数学を数学たらしめているものを浮き彫りにする、という点できわめて興味深い本だ。そこに「ミレニアム問題」の経緯が触れられている。

実は、「ミレニアム問題」には先例がある。ヒルベルト空間で有名な数学者ヒルベルトが20世紀の幕開けに全世界の数学者に向かって23の問題を解いてもみよ、と挑戦状を叩きつけた「ヒルベルト問題」である。その後21世紀が始まろうとする2000年5月、この「ヒルベルト問題」100周年を記念して新世紀の数学界に新たな7つの難問が提示された。これが、先の「ミレニアム問題」である。

ここで筆者が興味深いと思うのは、むしろ

この1世紀前の「ヒルベルト問題」の与え方、その設定の趣旨である。というのは、「…フェルマーの最終定理のような具体的な問題に焦点を当てるのではなく、もっと概念を駆使して考えるよう、数学者たちに呼びかけたのである。数学の風景のひとつひとつの岩を調べるのではなく、その分野の空高く気球で上がるきっかけを提供し、眼下に広がる地形を理解せよ、と励ました」（同書29ページ、傍点は引用者）、という点が重要に思えるからだ。

会計学のミレニアム問題

数学の未解決問題のリストと同じく、会計学にもそうした未解決の難問は存在するのだろうか。もし存在するなら、一生棒に振ってでも会計学の論証問題にチャレンジするつわものも出てくるかもしれない。だが、数学とは違って、その種の難問が仮にあってもごく限られるだろう。ともかくも、未解決問題のリストを考えること自体が会計学にあってはきわめて革新的な発想だが、実は会計研究者にもいた。それもれっきとした日本人、会計学分野での“頭脳流出”の代表格、カーネギーメロン大学の井尻雄士教授である[‡]。

一般に、会計学や経営学は実学の最たる分野であり、論理（ロジック）よりも現実の役立ちが優先されやすい。その点で、学問というには“俗っぽい”分野というのが一般の見方だろう。だが、会計研究の未開拓分野、未解決問題をリストアップするという発想自体、会計学をチャレンジングでエキサイティングにする可能性を拓く。そして、その1つとし

て挙げられたのが、なぜ複式簿記は複式なのかという根源的問いかけであり、複式簿記への論理的挑戦ともいえる「三式簿記」の発想とその論理展開であった。7, 8世紀にもおよぶ複式簿記の歴史からして、まさにびつたりのみレニアム問題といえる。

ここではその詳細には触れられないが、会計学上のミレニアム問題はあるのか、あるならどのような問題か。こうした問いかけは、とりわけ「有用性」を基軸にした“役立ち論”に偏りがちな今日の会計アカデミズムにあって魅力的だ。そのさい重要に思えるのは、先に引用したヒルベルトの問題設定の趣旨である。

今日必要なことは、まさに「もっと概念を駆使して考えよ」、「眼下に広がる地形を理解せよ」ということであり、そのために会計の地平を見渡す会計学のミレニアム問題が望まれる。むろん、数学のミレニアム問題のような高額の賞金はつかないだろうが。

（『税経通信』07年6月号、巻頭言から）

* なぜこのような天才が生まれてくるのか、これが最大の関心事だが、筆者のホームページ「時事会計教室」コーナーNo. 32では天才の生まれる3つの条件（これがまたなかなかいい）を紹介している。

† ちなみに、わが国にも不思議な数学者がいる。戦後、日本で最も独特な数学者といわれる佐藤幹夫である。その人物像については前掲の筆者のホームページ参照。

‡ 筆者のホームページ「インタビュー」コーナーにおける「カーネギーメロン大学にて井尻先生と語る」（1989年12月）の冒頭では、会計学にも「あっと驚く」論証問題があるかをめぐって対談している。